



# 文集 - フォトエッセイ -

YAMASA 言語文化学院

AJSP 2016年1-3月期

## 目次

- 一. 上にある故郷ふるさと  
小川尤欠とががけ
- 二. 空港  
呉 彰根
- 三. ピレネーの城  
アレクサンダー
- 四. 現代の動物  
クリス
- 五. ゆみ  
夏目祐紀



上にある故郷ふるさと

小川 尤欠とががけ

蒲郡市の夕焼け。橙色に染められた空を見ると、空を飛びたいなあと思うようになる人は少なくないだろう。僕もそんな気分になってしまおう。魔法で飛びたい訳じゃなくて、パイロットでありたい。また飛行機に乗って、またそのふわふわ雲と遊びたい。戦闘機パイロットになれなかった僕にとっては、地面を歩くのが情けないのだ。昔、僕は自家用機の免許を取る道を歩み、経験も重ねたが、健康診断の結果は先生に心配をかけた。僕は急に飛行機のコントロールができなくなる可能性が一般人より高いと厳しく忠告されて初めて、僕が空を飛ぶのを望んでいるのは僕しかないということが分かった。僕はパイロットでも何でもないと。ただの我がままだともしものことがあったら……。それで自分の手で翼を切った。二度とラテ・アートのように染められたあの空を飛ばない。地面を紅く染めずに済んだが、僕はまだ飛びたい。ふるさとに戻れないことを思い出させる橙色を眺めてしまおう。そして、何色でもない、堅い地面を歩き続けてしまおう。飛びたいという想いを忘れようとしながら、歩き続けてしまおう。

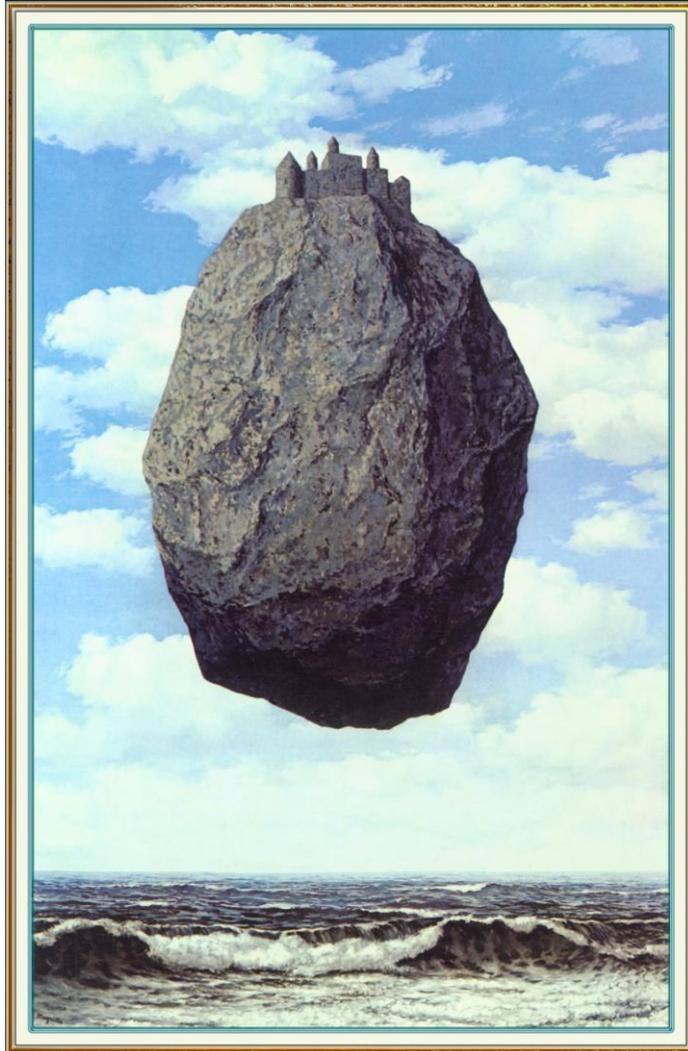


空港

呉 彰根

「何回目だろう。」韓国と日本を行ったり来たりするのは。両手では数えられなくなってから、もうその数を数えないことにした。二十代の頃より軽くなったが、重いといえれば重いこのキャリアを必死に引きずった。やっと乗り場の入り口にべたりと座ったら、一気に訪れる余裕。

「宿命なんだ。こうする運命なのだ。」と自分に言い聞かせる。こう思えたのもこの哀しいが落ち着く景色のおかげ。急いで撮った割に、自分が感じている心が上手に写されてうれしい。しばらく見ていたら、いつのまにか搭乗時間。こんな時に限って速やかに流れてしまう時間。心細い気持ちで重くなってしまった足を引きずった。



## ピレネーの城

アレクサンダー

この絵は1959年に有名なベルギーの画家のルネマグリットによって描かれた。

絵の意味と解釈については様々な仮説がある。ウィキペディアによるとこの飛鳥は希望の象徴だとされているが、私にはじめて絵をみた途端全く違う解釈が浮かんだ。

この写真の中央は巨大な岩だ。そして冠のような小さな城が岩を完全なものにする。

私ははじめ「ラピュタだ。」と考えた。しかしラピュタの底は完全に平らだったから「ラピュタ」ではなく、小惑星だと考えた。その解釈の一つの理由のやはり岩の灰色や生命体の不在などだ。そして、無限に広がる青空と青海原は宇宙をイメージさせる。画家は孤独や恐れだけではなく驚きを絵にこめたかもしれない。未知への魅力と恐怖を同時に表すことに成功している。絵を描いた年、一九五九は宇宙探検の始まった年だ。人類が興奮している瞬間を永遠に心に刻むという意味が絵にこめられた違いない。

しかしまだ理解できない点がある。どうしてその絵の名称は「ピレネーの城」なのか。ピレネーは厳しい挑戦と試練を象徴している。その山を越えるのは明らかに難しいことだ。もしその山に鉄壁の城があれば、挑戦がさらに厳しくなるだろう。

私にとってはそれが宇宙と宇宙の探検を象徴しているように思える。

当然、見る人それぞれに違った解釈があってよい。



## 現代の動物

クリス

赤いぼやけた背景に狼の写真が貼ってある。写真の上に猿の頭の輪郭が白墨で描かれている。写真を見ているとあたかも記憶がかすむように感じる。白墨の輪郭は内部と外部を隔てる。しかし、写真の縁はこの境を犯す。狼は見る物を睨む。殺すように。しかし、狼は内部か外部かわからない。昔か今か、自分か他者かわからない。ある者は、人間は捕食者の猿であると思っている。また、ある者は人間の意識の根底にはトラウマがあると思っている。そして、またある者は、人間は死を求める衝動があると思っている。どちらにしても我々は危ない動物だ。



ゆみ

夏目祐紀

彼女を初めて見たのは、教室のことだった。それは春だった。明るく、暖かく、晴れた日であった。

彼女が教室に入るのが眼に入った時、一瞬教室の喧騒も、周りの学生のキヤーキヤー騒ぐ声も、教室の明るさも急に消えてしまった。

「ナントキレイナコ！」

「これは只美しい夢なのだろう。」

「忒度と見られざりきなあ……」

と思うと、彼女は教室の隅にあるイスに座った。教室の隅とはいえ、明るい場所で、しかも自分の斜め前だ。

「スゴイカワイイ！」

その瞬間、彼女は自分と目が合った。彼女はにっこり笑ってくれた。心はビビッと、ビビッと。フト恋の予感がした。

「サー、イクゾ！」

「は……はじめまして……棗です……」

「はじめまして。ゆみです。」

ゆみ……ゆみ……何て美しい名前……